Japan Storytelling Network Newsletter No.98

NPO法人 全日本語りネットワーク

2025. 4. 22 発行

ニュース

〒185-0021 東京都国分寺市南町2-18-3
国分寺マンションB－03A
(FAX)0237-67-7001 (HP) http://japankatarinet.jp/
(E-mail) welcome@japankatarinet.jp (振替)00130-2-114808

語りは、人を育て、つなぎ、街をつくる

三田村慶春（全日本語りネットワーク理事・絵本＆カフェ《おばあさんの知恵袋》主宰）

語りと出会う

JR東十条の小さなホールで、「語り」というものに初めて出会ったのは、29年ほど前の1996年のことでした。プログラムには「語り／尾松純子」と記されていたものの、席を埋めていた80人ほどの殆どが女性であり、男性客がわずかしかいないことに不思議な思いがし、ここに居るべきではないのか、と席を後にしようと思い迷ったほどでした。やがて会場が暗転し、登場した語り手のコスチューム、凛とした出で立ち、そして「一人語り」。それまでの迷いは消え、その場を離れることができなくなりました。そのわけは、その日から30年ほど前の中学生時代に観た映画のワンシーンの記憶が蘇り、舞台の語り手・尾松純子さんと重なり合ったからなのです。リバイバルの米映画、「女優志願」の中で、女優を目指す主人公、小柄なスーザン・ストラスバーグが、小さなホールの舞台で、黒のワンピースに身を包み、ギリシャ神殿の柱を模した小道具だけを傍らに置き、物語を語っていた場面でした。その時から、私の「語り」という表現方法、言葉のあり様を探る道が始まったのです

語りは人を育て、人をつなぐ

学生時代から、自らの発する言葉のあり様、他者と交し合う言葉の存在する意味を訪ねあぐねていた私に、「語り」という表現方法は、学べば学ぶほど、その奥の深いことを気づかせました。物語の主人公や登場する者たちの置かれた歴史、社会背景や心理状態を読み解くこと、その言葉を発する「語り手」としての自分と向き合うこと、語りに耳を傾ける「聞き手」の表情や仕草を見て、どのように物語の起伏やリズム、強弱の場面を形作っていくのか、一語一語、一場面一場面が、表面上、物語を整えるに留まらず、生きた物語として再現することが問われるのですから。普段の暮らしの中で、私自身と他者との関係が変わってきたのです。このことは、故・櫻井美紀氏が自宅で開かれていた勉強会で、「『語り』は、物語を語るだけでなく、日常の生活にこそ生かされるもの」と言われていたことを思い出させてくれました。

語りがつくる街

東京・国分寺市で運営する、絵本＆カフェ《おばあさんの知恵袋》は、昨年11月で、創業50周年を経ました。この25年は絵本に加え、「語り」に関わる図書、資料を収集し、来訪される方々に「語り」の奥深さ、魅力を紹介することにも努めています。また、語り手や音楽演奏家とのコラボでの語りの会も催しています。一例を挙げれば、「物語はささやく」を毎月、ストーリーテラー・八重幡典子さんと、「絵本と音楽で訪ねる世界」を音楽演奏家の優木ももかさんと催し、今年は、なんと古屋和子さんに一年を通して、宮澤賢治の「イーハトーブの世界」を語っていただく機会にも恵まれています。 また、絵本の読み聞かせグループはもちろんのこと、紙芝居のグループ、童話づくりや詩、俳句、朗読の活動に日々励んでいる人たちも集います。それぞれの関わるジャンル、表現方法は異なっても、今のデジタル時代だからこそ、「これでいいのだろうか」「何とかせねば」と、言葉で表現すること、生きた言葉を通じて他者と関わることに心を砕いている人々が多くいるのです。こんな大人たちから、愛情いっぱいの言葉を預けられた子どもたち、青年たちには、きっと生きる力、チャレンジする力が宿ります。更に、大人たちが楽しそうに語る姿、声の響きを、共に体感した子どもたちは、それぞれの暮らす街に愛着を抱き、やがて成長した日には、互いに言葉を交し合い、手と心をつなぎ合うことに疑心を持つことはないでしょう。彼らにとって、その町や村、そして大都会さえもが、彼ら自身の「ふるさと」としての息づかいを始めるはずです。